

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

| | |
|-----------|------------------|
| 学校名・団体名 | 上越教育大学附属小学校 |
| コース | 学校支援コース |
| 活動・研究のテーマ | 「実感」に着眼した教育課程の開発 |

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 研究の経緯

当校では、今年度から、第12期教育課程開発研究を立ち上げ、新たな実践研究に取り組んできた。

社会に目を向けると、変化の激しさや不確実さ、様々なものやことが相互に影響を及ぼす複雑さや曖昧さが一層高まり、その中で子どもが生きていくが見えてきた。また、教育においては、多様な「人・もの・こと」とのかかわりと、その子どもらしい学びを通して、人生を自らつくっていく子どもを育むことが志向されているが見えてきた。

このような社会と教育の現状から、子どもが、不確実さや複雑さ、曖昧さをもつ多様な「人・もの・こと」とかかわり、それらを共有する仲間と共に活動しながら、感じたことや考えたことに基づいて活動や生活をつくり変えていく姿を追求することが大切であると考えた。そして、生きる喜び、知識や技能、道徳的な価値観、集団の中でよりよく生きる自分などを生み出す子どもの姿を具現する教育課程の在り方を探ろうと、研究主題を「生み出す子どもが育つ学校」とし、教育課程の開発に取り組むこととした。

加えて、人工知能が人間の仕事を代替する「AI時代」になりつつある現在、未来においては、人間らしさや人間の強みが問い直され、これまでよりさらに重要になると考えた。学校には、人工知能に代替されない人間らしさや人間の強みを育む教育が求められていくだろう。人間と人工知能の知性を対比すると、人間には感性があり、それと理性とが相乗的、相補的にはたらくことが人間らしさや人間の強みと言える。この見方に基づくと、学校教育においては、感性、すなわち、子どもが感じることを大切にするとともに、それと考えることが一体的になされることを促す教育課程、教育活動の重要性が高まると考えた。そして、その感じることと考えることが一体的になされながら子どもの内につくられていくものを、私たちは、子どもの「実感」ととらえた。

このようなことから、教育課程の開発において、子どもの「実感」に着眼していくこととした。また、当校の教育課程は、2015年度より、「創造活動」（主に、総合的な学習の時間）、「実践教科活動」（教科活動）、「実践道徳」（主に、「特別の教科 道徳」）、「集団活動」（特別活動）で構成する。子どもの「実感」に着眼し、それら4つの教育活動を再構築し、第12期教育課程開発研究1年次として、「生み出す子どもが育つ学校」の根幹をつくることに取り組むことにした。このようなことを研究テーマ『「実感」に着眼した教育課程の開発』に込めた。

2 研究の目的

第12期教育課程開発研究1年次である2023年研究においては、子どもが、不確実さや複雑さ、曖昧さをもつ多様な「人・もの・こと」とかかわり、それらを共有する仲間と共に活動しながら、「実感」に基づいて活動や生活をつくり変えていく姿を、4つの教育活動において追求していくこととした。これはすなわち、子どもの「実感」の内実を追求することであり、それを通して、生きる喜び、知識や技能、道徳的な価値観、集団の中でよりよく生きる自分などを生み出す子どもの姿が明らかになっていくと考えた。

また、子どもの「実感」の内実を明らかにしていくとともに、その姿に基づきながら、4つの教育活動を問い直し、再構築していくこととした。明らかになりつつある子どもの「実感」から4つの教育活動を問い直すことを通して、各教育活動の理念や学年の目標がつけられたり、子どもがかかわりをつくる「人・もの・こと」の特性や各教育活動における子どもの「実感」が見いだされ、とらえ直されたりしていくと考えた。その過程は、教育課程を構成する4つの教育活動を、子どもの「実感」から再構築することであると言える。このようなことに取り組みながら、より一層、「実感」が明確になっていくと考えた。

したがって、研究の目的を整理すると次の2つである。

- 「実感」が動く子どもの姿を4つの教育活動において明らかにすること
- 「実感」が動く子どもの姿から、4つの教育活動を問い直し、再構築すること

このように、子どもの「実感」を明らかにすることと教育課程を構成する4つの教育活動を再構築することに併せて取り組んでいくことを通して、「生み出す子どもが育つ学校」の根幹をつくることを目的とした。

3 研究の取組

(1) 活動公開

各職員が、活動公開を通して子どもの「実感」を提案し、活動における子どもの姿を基に、子どもの「実感」を検討した。実施時期とそれぞれの目的は、次のとおりである。

- ① 4月21日～5月18日 子どもが「実感」に基づいて活動や生活をつくり変えていく姿について思考し、「生みだす子どもが育つ学校」を具現する教育活動をつくるため。
- ② 6月2日～6月15日 同上
- ③ 9月15日～10月12日 研究主題「生みだす子どもが育つ学校」における「実感」が動く子どもの姿を明らかにするため。

全期間を通して42本の活動公開を行い、子どもの「実感」を探っていった。

(2) レポート執筆・交流

活動公開を通して思考したことをレポートに執筆し、それを職員間で交流することを通して、子どもの「実感」を大切に教育活動についての主張を形成していった。各職員が8本ずつレポートを執筆した。

(3) セッション・ディスカッション

活動公開、レポート執筆・交流に取り組みながら、セッションを通して「生みだす子どもが育つ学校」の教育課程を構成することについて意見交流し、共通の認識をつくるべきことについてはディスカッションで協議した。それぞれの実施時期とテーマは、次のとおりである。

- ① セッション・4月13日 「子どもと出会ってとらえた子どもの『実感』や『実感』が動く子どもの姿」
- ② セッション・4月20日 「子どもの姿とその子どもの記述を基にとらえた子どもの『実感』や『実感』が動く子どもの姿」
- ③ セッション・5月2日 「子どもが活動する様子を撮影した写真を基にとらえた子どもの『実感』や『実感』が動く子どもの姿」
- ④ セッション・5月25日 「ホームページの記事を基にした子どもの『実感』や『実感』が動く子どもの姿のとらえ」
- ⑤ セッション・6月22日 「子どもの『実感』にある、子どもの身体を突き動かす感情、子どもの身体にもたらされる感覚、子どもの身体になじまない出来事が指し示すもの」
- ⑥ セッション・7月21日 「『実感』における子どもの思いや願いとはどのようなものか」
- ⑦ ディスカッション・8月4日 「子どもの『実感』における子どもの思いや願いに欠かせないことは何か」
- ⑧ セッション・8月24日 「子どもの『実感』における『五感をはたらかせながら身体に起こっている』とはどのようなことか」
- ⑨ セッション・9月7日 「子どもの『実感』における『五感をはたらかせながら身体に起こっていることを時の経過や契機に応じて思い起こしていること』とはどのようなことか」
- ⑩ ディスカッション・9月14日 「『実感』における『五感をはたらかせ』ることに含まれていることは何か」

(4) プロジェクトチーム活動

活動公開、レポート執筆・交流、セッション・ディスカッションを通して明らかになってきていることを基に、プロジェクトチーム活動で4つの教育活動について問い直し、その再構築を図った。

(5) 2023年研究小冊子作成

研究の成果をまとめた小冊子を、職員の分担執筆で作成した。A4版16ページで、構成は次のとおりである。

pp.1～5 表紙、研究主題・副題設定の意図、「実感」の定義、「実感」の内実

pp.6～13 創造活動、実践教科活動、実践道徳、集団活動の実践事例

pp.14～16 4つの教育活動の各学年、各教科の目標等、裏表紙

製本した小冊子は、研究会参会者に配付するとともに、県内の全ての国立、公立小学校に送付した。

(6) 2023年研究会・研究協力者会

6月30日と10月24日に、当校で、研究協力者会を開催した。県内公立校、大学に所属する研究協力者に対して研究の進捗の発表、活動公開を行い、それらについて意見交流を行った。

また、11月22日に、当校で、2023年研究会を行った。

内容は、研究発表、活動公開、協議会、講師の鹿毛雅治様（慶應義塾大学）と研究主任、活動公開提案者とのセッションである。全国各地から281名の参会者を迎えた。

4 成果

○「実感」の内実を明らかにし、「実感」を定義付けたこと

私たちは、活動における子どもの「実感」を見つめ、その内実は、身体にもたらされている感覚、身体を突き動かす感情、身体になじまない出来事の3つに整理でき、「実感」には動的な性質があることを明らかにした。

そのような動的な性質をもつ「実感」が確かに動く創造活動、実践教科活動、実践道徳、集団活動をつくっていくことが「生みだす子どもが育つ学校」の具現につながるということが明らかになった。

加えて、子どもが「実感」する姿を基に、「実感」を『人・もの・こと』とかかわり、思いや願いを実現しようとする過程において五感をはたらかせながら身体に起こっていること。また、そのことを時の経過や契機に応じて思い起こしていること』と定義付けた。

これらを通して、「生みだす子どもが育つ学校」の根幹をつくることができたことが成果の一つである。

○創造活動、実践教科活動、実践道徳、集団活動からなる教育課程の枠組みの再構築を行ったこと

私たちは、第12期教育課程開発研究の立ち上げにあたり、教育課程の枠組みについては、第10期教育課程開発研究から培われてきた4つの教育活動を継承した。そして、「実感」の内実、「実感」の定義、各教育活動における「実感」を基に活動や生活をつくり変えていく子どもの姿を基に、プロジェクトチーム活動において、これまでの各教育活動の理念、目標等を問い直し、「生みだす子どもが育つ学校」における理念、目標等を作成した。それらを作成する過程で、研究会活動案検討や活動公開、事後検討を行い、各教育活動における子どもの姿や教師の思い描きと、作成している理念、目標等とを照らし合わせながら、つくり変えていった。そして、各プロジェクトチームによる提案について検討することを通して、各教育活動の特徴を明らかにしながら、4つの教育活動の再構築が進んだ。

「生みだす子どもが育つ学校」の教育課程の枠組みの再構築を行ったことが、もう一つの成果である。